

KAMIYAMA Reports vol. 250 「米ドル(対円)の決まり方:謎多き為替変化」(2024年9月13日作成) 正誤表

P.1 本文2段落目 誤	P.1 本文2段落目 正
「これからの米ドル(対円)の変化 = これからの日本の物価の変化 ÷ これからの米国の物価の変化 」	「これからの米ドル(対円)の変化 = これからの米国物価の変化の予想 ÷ これからの日本物価の変化の予想 」

上記の訂正に伴ない、以下部分について、わかりやすくなるように修正しました。

P.1 ここがポイント！ 修正前	P.1 ここがポイント！ 修正後
原則は簡単:物価の比較、しかし実態はインフレ率(物価の変化)の比	原則は簡単:物価の比較、しかし実態は金利の比で逆方向にも
P.1 見出し 修正前	P.1 見出し 修正後
原則は簡単:物価の比較、しかし実態はインフレ率(物価の変化)の比	原則は簡単:物価の比較、しかし実態は金利の比で逆方向にも

P.1 本文2段落目 修正前	P.1 本文2段落目 修正後
実は、「これからの米ドル(対円)の変化 = これからの日本の物価の変化 ÷ これからの米国の物価の変化」という少々面倒な関係がある。なぜ面倒かというと、変化を見る時には、物価「水準の比」ではなく「変化の比」という別物で考えることになるからだ。「これからの物価の変化」は、すなわちインフレ率の予想である。米ドル(対円)の変化は日米の予想インフレ率の比に関係がある。物価の比が安定すべき場所だとしても、それとは別に、日本の予想インフレ率が上がるほど米ドル安・円高方向に、米国の予想インフレ率が上がるほど米ドル高・円安方向に動くということだ。つまり、米ドル(対円)が毎日「変化」する理由はインフレ率の予想が変わるから、ということになる。	実は、予想インフレ率が頻繁に変わるのだが、それを反映して金利水準が変わることで、面倒な関係が生まれる。金利取引では、「これからの米ドル(対円)の変化 = これからの米国物価の変化の予想 ÷ これからの日本物価の変化の予想」という購買力平価とは逆の関係になってしまうからである。「予想インフレ率 = 名目短期金利 - 実質金利」とすれば、予想インフレ率の上昇で名目金利が上昇し、その通貨の魅力が増して資金が流入し、通貨が増価する。つまり、日本の予想インフレ率が上がるほど米ドル安・円高方向に、米国の予想インフレ率が上がるほど米ドル高・円安方向に動くことになる。こうして、為替水準はそう簡単には購買力平価に近づく方向には動かないことになる。

P.1 本文3段落目最後の文章 修正前	P.1 本文3段落目最後の文章 修正後
為替レートは物価の比に収束しようとするとしても、目先の変化の方向はインフレ率の差、つまり金利の差によって決まりがち、ということになる。	為替レートは物価の比に収束しようとするとしても、目先の変化の方向はインフレ率の差、つまり金利の比によって(逆方向に)決まりがち、ということになる。